
あれから僕たちは・・・

tsubochika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あれから僕たちは・・・

【NZマーク】

N4292D

【作者名】

tsubochika

【あらすじ】

高校生になつた野球好きの龍一が、大親友の慎と繰り広げていく物語。あることをきっかけに次第にすれ違つていく彼らの行く末とは?また、彼らの周りの仲間たちの関係にも注目!!

第1話 Memory

長かつた試験勉強も終わって、念願の高校生活が始まった。新しい生活のスタートに心浮かれていた。あつそうそう、自己紹介するの忘れてた。俺の名前は龍一。カツコイイでしょ？友達には言わないけど結構気に入ってるんだ。そして野球が好き。中学でもピッチャーダったんだ。野球といえば俺とバッテリーを組んでた慎は俺と大の親友。いつも冷静で時々頭に来るけどいいやつ。同じ高校入ったから、またバッテリー組めるといいけど……。おっと、噂をしてると何とやらかかな。慎が掃除を終えたようだ。

高校に入つてから、いつもこりやつて一緒に帰るよになつた。話題といえばいつも野球だつたけどね。でもある日、奇妙なことを言った。

「今の生活、楽しい？」

「いや、楽しいけど。」

「…………あ、ごめん、こんなこと聞こりやつて。」

「へ、こや何のこと？」

俺は慎を察して深くは突つ込まなかつたが、後々もつと聞いておけば良かつたと思つた。2人は何かを察し合い、お互に無言だつた。

「そりゃお前、野球部入るんだよな。明日見学行ってみようぜ。」

「ああ、わかつた。」

少し心配だった。「わかつたと言つてくれるか。その理由は約半年前に遡る。

中学三年の夏。野球の県大会決勝戦。多くの応援の中、あと一步で全国大会といつこの試合、負けられなかつた。試合は九回表を迎えた一対一だった。マウンドを降りた俺に慎はこうつぶやいた。

「後は俺に任せろ。」

その言葉は今でも忘れられない。ツーアウトランナー無し。延長戦か、サヨナラ負けか。そういうモードの中、中学でも指折りのスラッガーであつた慎は甘く入つたカーブを捕らえ場外ホームランを決めた。そこまでは良かつたのだが……。

マウンドに向かうのが怖かつた。差は一点。俺は先頭打者をストレートのフォアボールで出してしまつ。後でナインが声をかけてくれていたのを知つたが、この時は緊張で全く聞こえなかつた。でもその後、よくは覚えていながツーアウトにこぎつけた。しかしバッターは四番、慎と並び称される屈指のバッターだ。打率は六割二分三厘。ホームランはないがミート力はずば抜けている。慎は、

「ホームランさえ打たれなきゃ大丈夫。」

そつ言つて内角のカーブを要求してきた。俺の得意球でもあつたが、奴の得意球でもあつた。裏を搔こうといつのだ。緊張の中、投げたボールは際どく入つた。しかし奴はフォームを崩されながらもスタ

ンドに一直線で運んだ。後で聞いたが、カーブは予想もしていなかつたし、ただボールにあわせただけだったと本人が言つてたが、投手にどつてこれほど悔しい言葉はなかつた。

チームはサヨナラ負けをした。だれも俺たちを攻めるやつはいなかつたが、後々慎のリードが悪かつたと周りで言つやつもいて、責任感の強い慎は少し野球に嫌気をもしていた。

他人からして見ればそつたいしたことではなかつた。俺もそう思うのだが、あれから俺たちは何かが変わつた・・・・・氣がする。

そしてまた桜の木の下でいつものように別れた。今日の強風のせいか、だいぶ桜が散つていた。その桜をボーっと見つめていると後ろから誰かに突かれた。こうされれば大体誰かわかる。中学時代強健のセンターとして活躍・・・・・したかは定かではないが、こいつのバックホームに何度も助けられた。おかげで借りを返せと借金取りのように毎日やつてくる。困ったもんだ。って誰か言ってなかつたわ。こいつは明だ。

「何、桜なんか眺めてるの?あ、わかつた。恋してるんでしょ?」

ほんとにこいつはいるな。こんなこと言わなきゃほんとにいいやつなんだが。

「お前はほんとに能天氣だなあ。」

「お前に言われたくないよ。」

「何を根拠に?」

「お前はただの野球馬鹿で、俺は天才。」

「おいおい、嘘は嘘つなよ。」

「あーあー野球馬鹿で悪かつたよ。中学の時結局一度も俺の球打てなかつたくせに。」

「テストの点数はいつも俺が上だろ?」

「おいおい、それとこれとは話は別だろ。」

「そういうばば、慎は?」

「もう帰つたけど。」

「あいつ野球部入んの? あいつ相当凶んでたじやん。」

「やつはやうなの!..?」

「いっしょにいるくせに気づかなかつたのー? まあ、あいつのことがから気づかれたくなかつたんだろ。ほら、捕手は投手に苦労させないんだよ。」

「何で俺にそういうこと話してくれないんだろうか。そりは思こつ今度はプロ野球の話で盛り上がった。」

「へえ~。」

明と別れすぐ家に着いた。帰ると親は勉強しないとうるさい。高校は中堅の学校で進学校でもなくせに大学進学率を上げようと必死だ。大学で野球をしたかったから、意地でぎりぎりの学校に入ったが、明日から講習続きたらしい。まだ予習をしていない。あー、もう嫌だ。そういえば明日は体育だったつけ。野球部にいくのも楽しみだな。おっ、明からメール？

-日本ハムが逆転したぞ！！

だから俺はソフトバンクのファンだつづーの。明の馬鹿さ加減に呆れて俺は勉強することにした。

第1話 Memory（後書き）

読んでくださってありがとうございます。いかがだったでしょうか？この次がどれだけ先になるかわかりませんが、続きを読んでもらえるとありがたいです。

第2話 違和感

次の日

ついに長い授業が終わり、放課後になつた。待機に待つた部活見学。早速慎と野球部に行くことにした。芝のあるグラウンド。田舎ならではの「広さ」だ。

マウンドで投げさせてもらえるということだったので、俺は一球投げさせてもらつた。投げた瞬間、自分でも感覚が違つたのがわかつたが、何よりも3年生の正捕手が球を後逸してしまつた。

「おいおい、なんてやつ球投げるんだよ。140km出でるぞ。」

「はあ。」

俺にもよくわからなつた。監督の田に止まつた様で、

「どうだ、入部するんだろ?」

「まあはー。」

「球種全部投げてみる。」

俺は今まで超遅球投手だったので、変化球は4つ持つていた。もしかしたら受験勉強しながらランニングと筋トレを欠かさなかつたのが効いたのかもしれない。

「まずはカーブ!」

久しぶりの慎のミット。しかし慎は首をかしげた。

「次はスライダー。」

まだ納得しなかった。この後も、フォーク、チェンジアップと投げたが慎はなんとも言わず、監督がストレートを要求したのでまた投げた。

とにかく球速だけは早くなつたのは確かだつたが、俺にもしつくりこなかつた。監督は俺たちに明日から練習に参加するように命じて俺たちを帰らせた。

何なんだ・・・・・。そうすると慎はこう言つた。

「回転が足りないんだよ。球威はないし、コントロールがめちゃくちゃだ。」

何だよ、いきなり・・・・・。慎はすべてを見透かしていた・・・・・。

「ランニングをもつと増やして、シャドウピッチングをする」と。
「じゃあな。」

そう言つと慎は一人で帰つていった。なんかやな感じだな。

「お前、すげえな！あんな球投げてたつけ？」

「なんだ、明か。お前こそ素振りしないと、センターなんか夢のまた夢だぞ。」

「なんか今日こつも以上に冷たいね。」

「別」。

俺は野球を楽しめればいいと思つてきた。が、この時初めて、甲子園で勝つてやる・・・・・そんな気持ちが心の中に芽生えた。

第2話 違和感（後書き）

第2話も引き続き読んでいただいてありがとうございます。是非
続きを読むだけれど幸いです。

いよいよ野球部に入部し、すれ違つていいく一人が共に甲子園を目指していきます。この先は大きく展開が変わっていきますのでお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4292d/>

あれから僕たちは・・・

2010年12月18日02時35分発行